

『広大難思の大慶喜』より抜粋

もう一步進みなさい

四、真偽の水際の立たないのが二十願

五、実機の見えないのが第二十願

六、難信の法を知らないのが第二十願

四、真偽の水際の立たないのが二十願

名号を眺めているのが方便の第一十願で信前の機、名号と一体になつたのが真実の第十八願の信後の機である。方便から真実に入るのが真似から本物、贋物から本物、調熟の光明か

ら攝取の光明に生かされるので、初めから眞実の者はいません。方便にいる間は、眞実は判らないのです。眞実に入つてこそ長い闇路を迷うていたことが判るのです。方便とは、他力廻向とは言いながら凡夫の計らいがやまないのでから、いくら他力のように説明して贋てみても、自心建立の心の域を離れすることが出来ないのであります。

聞いたも知つたも覚えたも皆凡夫の智恵が合点したのであり、有難いも嬉しいも慎みも悉く凡夫の気持ちに計らわれているのですが、そんな計らいが悉く間に合わなくなつた時、計らいつきて親に計らわれていたことに驚き、間に合わない心が本願の間に合うた、凡智がつきて仏智に生かされた時を、非意業の意業と言つて凡夫の思いでない思い、他力不思議の境地、これを不可称不可説不可思議の信楽と言つたのです。凡智がつきて仏智に生かされたのですから、百八十度の大展開、その一刹那をたのむ一念の時といい、「この一念をもつては娑婆のおわり臨終と思え」とか「これを知らざるをもつて他門とし、これを知れ

るをもつて真宗のしるしとする」とおおせられたので、第二十願の行者はその展開を知らないのですから、いつとはなしに信仰を頂いたと思つてゐるだけで、水際も角目も何にもわからぬのです。凡夫の智恵のなかで、頂いたつもりになつて合点してゐるのですから、変わらぬのです。安心だとと思つたり、言つたりしているが、開発の一念を突破していられないからわからないのです。その人は真宗の中にはいながら、真宗の不思議な味を知らないから、他門とすると仰せられたのです。

この一念の味は、凡夫の智者や学者の想像するようなチッポケな問題ではありません。不可称不可説不可思議の信楽ですから、十方法界を丸呑みにした味、すべての罪惡悉くが法悦に変わり、一切が感謝ができる身になるのです。

信前の第二十願の行人は、法を眺めて他力ではないか、廻向ではないか、素直に聞けと

自分の実機を包んで見ていなかつたが、調熟の光明で根気が熟して、法の鏡に接近してきたから、三毒の煩惱より以外の逆説の屍の本性が見えてきたのです。自分の心の素顔に驚いたとき、三定死の境地に立つのです。私はない物を出せとは申しません。有る物を有ると素直にご覧なさい。それが仏さまに五兆の願行をさした代物です。それが死んで助かるのではありません。いま助かるのです。いま攝取されるのです、いま即得往生するのです、いま信楽開発するのです。真宗の道俗は素直に聞いていると自惚れているから、逆説の屍がいることさえも知らないのです。それが見えてきて、真剣に法を求め、三定死の境地に立たされることが「難中の難これに過ぎたるはなし」です。自分が邪見惰慢の惡衆生であつた、三千世界の惡魔があつたと往生の望みの綱が切れたとき、仏智の不思議に生かされたときは同時であつて、その一刹那の大慶喜は筆舌の及ぶところではありません。天地が転倒したほどの大展開、大自信、大決定心、金剛心、深心、どんなに表現したらよいか、至心信楽

己を忘れて泣くより他に道はないのです。よくも口が裂けなかつたこと、よくも大地が破れなかつたこと、大慶喜の裏には大懺悔があります。三千世界のものはみな助かつても、わたし一人は助からぬかつたら、親が泣くの信法の大自覚がつくのです。これを二種深心と名づけるのです。第十八願の行者には、これだけの自信がつくのです。

同じ名号に向いていながら、二十願の人は法を眺めているのであり、第十八願の人は、法と一緒になつたのです。二十願の方便、信前の人と、第十八願の真実、信後の人とは信相のうえに天地の相違があるので、水際がはつきり諦得ができるのです。

こんな広い天地、こんな自由の天地のあることを諦得された聖人さまが「真仮を知らざるものは如來広大の恩徳を迷失する」といわれ、歯がゆくてたまらないから「ひそかにおもんみれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、淨土の真宗は証道いま盛んなり、しかるに諸寺の

釈門、教に昏くして眞仮の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷うて邪正の道路を弁ふることなし」という大胆な批判攻撃をなさつたのですが、この鉄槌は外に向つての攻撃だけでなく、内に向つては第二十願の人たちにも当たるのですが、自分たちは十八願だと自惚れてい るから、ツ蛙の面に水ツで反省するものが一人もいないのです。

## 五、実機の見えないのが第二十願

イノシシを追い出すは勢子の役目です。病原を見出してあげるのは医者の役目です。勢子が追い出したイノシシを射止めるのが猟師の役目です。苦を照らし出して樂を与えるのが弥陀の名号の役目です。

六字の名号は、南無は機の方、阿弥陀仏は法の方で十劫の昔に機法一体、願行具足で成就してあつても、それは法体成就の機法一体でありまして、助けるに間違いないと法が成就し

たのです。私が救われているのではありません。助かっているのなら、私が知ると知らないにかかわらず、十劫の昔に助かつてているのなら、信心も安心もいらないはずです。なぜ信心を頂け、信心為本とか、信心をもつて本とせられ候とかいうのでしょうか。助ける約束はできていても、私に届き、私に徹底し、私が満足しなければ私のものではありません。聞即信の一念で仏智が満入したときを信念冥合の機法一体というて、親子の名乗りがあがり、迷いの根が切れるのです。仏智の不思議が私の煩惱と一体になるのです。

## 中略

真宗では機の見方が足りないので。心のなかにどんな化け物が隠れているか、ご承知ですか。それが臨終でなければ見えてこないので。その厄介な心の古狸を、元気な達者な間に照らし出してもらつて、弥陀の利劍で退治してもらえ、というのが平生業成というのですよ。平生とは臨終ではない、達者な元気な間、業成とは業事成弁という専門語だから、私は

が説明すれば一大事業が完成する、望みが契う、大事業が達成できる、ということです。人間は無限の欲望があるから、満足を知らない。金でも、名誉でも、あればあるほど欲を起こす。それが一場の夢にすぎないのです。そらごとたわごとに気のついたときは、つぎの世界に出ているのです。早く精神的の満足を得て、人生に受生した有意義な生活をせよとうことです。

人間は、樂を求めるながら苦しんでいるのです。光に向いて進めば、物質の影法師はついてくるのです。光を背にして、物質や名利の影法師を追えば追うほど、走れば走るほど、まだ足りない、まだ足りないと追わねばならないのです。その根本は、無明の闇の心にあるのです。秘密の部屋に頑張っている化け物は、真宗で教えている三毒の煩惱のような簡単な代物ではありませんよ。十八願から洩れた代物が五逆、謗法、闡提、邪見、憍慢、弊、懈怠、私が調べただけがこの七つですが、こんな心はたびたび説明していますから、今は略します。

こんな心があることさえも知らず、素直に聞いていると平氣でいるのですから、宗教を聞く器ではないのです。絶対の機が照らしだされていなければ、絶対の法とピントが合わないから一体になれないのです。

機を見るのを嫌うのが第二十願の人で、眞実の機が照らし出されて名号と一体にさして頂いたのが、第十八願の行者です。眞実の機とは、眞実に二通りがあります。仏の眞実は眞実、凡夫の眞実は嘘が眞実です。凡夫の眞実は、眞実がないのが眞実です。絶対の不実が知らされた人でなければ、仏の眞実に救濟された慶びはありません。実機を知らないのが、自惚れ強い第二十願の信前の贋物の信仰です。

## 六、難信の法を知らないのが第二十願

真宗では、他力廻向だから易い、凡夫は難しくてはできない、聖人は「遇い難くして遇う

ことを得たり、聞き難くして聞くことを得たり」と仰せられ、上人も「あら心得やすの安心や、行きやすの淨土や」とおっしゃつてあるから易いのだと言つておりますが、実際の御苦勞は知らずにお言葉の真似をしたところで、同じ証果を得られるはずがありません。食べたら満腹すると書いてあると言つたところで、食べねば満腹はしませんよ。美談を聞いて感激しても、信じても、あなたが成功したのではありませんよ。四十七士の本懐を遂げた講談を聞かされて、いくら感激をしても、あなたが白髮首を挙げた境地にはなれないのですよ。畠のうえで素直に聞いておいでになる方には、極悪最下の機類はどんな化け物かわからぬのです。五兆の願行をさせ、十劫已來立たしても氣の毒なとも思わず、八千遍のご苦勞をさしてもすまぬとも思わず、三世の諸仏に證明さしても、ひよつと墮ちはせぬかと疑うほどの強情我慢な人間が、法席に出たときだけ、素直な真似をして、聞き難いの、遇い難いのとよくも厚かましいことが言えますなあ。墮ちる者をお助けと覚えただけではありません

か。墮ちるものが痛くもなければ痒くもない、お助けと聞いても、有難くもなければ嬉しくもない、往生できる人間が当然行けるように横着に構えている人間が、どうして難信の法があ味わえましょう。あなたの機態は難化の三機、難治の三病と捨てられてあるのですよ。それが、色もなれば形もない宇宙の真理を諦得された阿弥陀さまの念力を、色もなれば形もない宇宙に遍満する絶対の悪性が、見たよりも握ったよりも、なおはつきりと諦得して一体になることは、これほど難しいことが世界中にあるでしょうか。一寸先のわからぬ人間が、ちよつとお聖教を読んでいるときだけ、自分だけは当分死ないと決めている人間が、お説教を聞いているときだけ少し感激の涙を催しただけぐらいの信仰で、久遠劫から流转している古狸が尻尾を出すと思つてるのでしようか。凡夫は煩惱があるから慶べるものではない、とおっしゃるが、救われていなから慶びがでないのですよ。

いくら難信の法と書いてあつても、自分だけは素直に遇うているのだという自惚れがある

から、私がいくら反省を促しても無駄ですけれども、誰かが驚きを立てて求めてくださるだ  
ろうと思つて書いています。

一、寿命はなはだ得がたく、仏世また值ひがたし、人信慧あることかたし、もし聞かば精進  
して求めよ。法を聞きてよく忘れず、見て敬ひ得て大きに慶ばば、すなはちわが善き親友な  
り。このゆえにまさに意を發すべし。たとひ世界に満てらん火をも、かならず過ぎて要めて  
法を聞かば、かならずまさに仏道を成じて、広く生死の流れを済うべし。

二、この經を聞きて信樂受持することは、難のなかの難、これに過ぎたる難はなけん。

三、もうもろの衆生のために、この一切世間難信の法を説きたまう。乃至 一切世間のため  
に、この難信の法を説く。これを甚難とす。

四、道俗時衆等、おのおの無上の心を發せども、生死はなはだ厭いがたく、仏法また欣い

がたし。とも金剛の志を發して、横に四流を超断せよ。

五、自ら信じ、人を教えて信ぜしむること、難きがなかに転更に難し、大悲を伝えて普く化

することは、真に仏恩を報ずるとなす

聖人は、遇い難い聞き難い、極難の信だとたびたび書いておいでのになるけれども、真剣に求道する人がいないのだから、<sup>かえる</sup>蛙の面に水<sup>みず</sup>、<sup>ぬか</sup>糠に釘<sup>くぎ</sup>、<sup>とうふかすがい</sup>豆腐に鉄<sup>くわ</sup>打つてもこたえない。  
それだけ血みどろに求道する人がいないのです。

第二十願の栴にいる人、晴れていない人、信前の人、方便の栴にいる人、真仮の水際のたたない人、死んだらお助けと思つてている人、素直に聞いていると自惚れている人、悪い人と口では言つているけれども罪の自覚のない人には、このご文の意味はわからないでしようが、聖人さまは悶死されますよ、説明してみましようか。

「まことに知んぬ、専修にして雑心なるものは大慶喜心を得ず」本当にそうであつたな  
あ、名号の独りばたらきと口では言つて称えているけれども、心に不安があり、心を見るの  
を恐れているものには大慶喜心がない。

「悲しきかな、垢障の凡愚、無際よりこのかた助正間雜し、定散心雜するがゆえに、出離  
その期なし。みづから流転輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰しがたく、  
大信海に入りがたし。まことに傷嗟すべし、深く悲歎すべし」

悲しいかな、迷いの凡夫は昔から今日まで、助業と正定業とが混乱し、自分の善し悪し  
で往生を決めかけているから、迷いを離れることができない。実機をつつんでいるのだか  
ら、自ら流転輪廻を重ねて無数の年月を要しても、仏の願力と一体になることができず、  
大信海に帰入することができないとは、法を聞かないで流転するのなら仕方がないが、聞き  
つつ、称えつつ、感情だけで体験できないとは情けないではないか、切り刻まれるほど苦し

いぞ、と聖人は歎いておいでになるのです。

「おほよそ大小聖人・一切善人、本願の嘉号をもつておのれが善根とするがゆえに、信を生ずることあたはず、仏智を了らず、かの因を建立せることを了知することあたはざるゆえに、報土に入ることなきなり」

智者や学者のお歴々、素直に聞いておられる善人は、如來廻向の名号をありがたがつて握つておられるから、他力不思議を信ずることができず、自分の智恵に腰を掛けているから、仏智満入を知らず、素直に聞いているものをお救いのように思つてゐるから、悪人正機の本願の根本を知らないから、報土に入ることができないぞ、と諒めておられるのです。

話を聞くくらいは誰でも聞くが、実地の体験が難しいのです。感情が合点するぐらいは誰でもするが、実機が照らし出される人が少ないのです。それに驚いて、求道する人がいない

のです。驚いて求道しようと思つても、これを指導する知識がないのです。知識に求道して晴れた人がいないのだから仕方がありません。「國に三人郡に一人」とかいいますが、大千世界に満てん火をも過ぎゆきて聞こうとする人は、殆どいないので。昔から妙好人伝に載るような有名な同行は、必死の求道をしていますよ。難信の法を聞き抜いていますよ。

難信の法の味のわからない人は方便、信前の第二十願の行人というのですよ。